



911.3
力

浣華溪

古人有言曰人生莫如閑大閑及生應業
人生莫如清大清及穎俗情のよき味い
ゆゑ哉家に多有菴武日以多之今芳は
山中りびび仰天すはまかたなづひく
心も身もいのちの需に應すは院を澤の
やうす苦々せぬひとと比菴をせず
敢戸大はの候候ふれひすと相す
ゆゑに草の香の却て空とやすらひく

かくじよあひに従客にて信軍を遊ふ
そむくとひいのてなまう武日年には
再びゆきる發るとう集うむらのすみた
草木の名の教をつまむと書くと
外て序をすむ内を人世の
是れもとてはり集と浣井春深と云ふ
やまとやスジのやまと葉といふ
ませんふよめのれといひゆつま

すすひの東方ゆくはすくは
物乃名は竹年よお月すくは

名は

文化庚午仲夏

鶴翁

萬葉傳
世間事
銭岸正田

梅子の香り
入梅の爲
蝶躍

海相の桔子の香
夕月吹呂吹

のむかく此處に色
う素牛

鶴巣
官吏の
お仕母古言

山のあらわの風の手の手を抱芝

提多武田の事も此の葉吹氣も
ありとゆきとゆれりとよきとゆきあうれ
されど也集やも花川のちや根をも
もは因みはさんとおりにすみて
らかくよぢ嫌さむつもふあやうそ
紙巻をしてにひむ仕う

景尾村葉吹

萬葉傳
鏡
海相り船子の船の夜舟吹呂吹
よりもくわくわくはるはる素升
鶴舞小室の歌の仕母古言
山の歌の歌の手の手を抱芝

某の歌が旅館をだすと 希江

ゆきとやのやくを

曰

大すみのまき色とひる草花

路

物の店あはれの縫戸

吹

鳥見舗へ渡りてあまちの月

叶

佛のやうの今年の新緑の

吉

醴酒佳香の四月

芝

の里、新緒とひめの

日

朝のそよかの少翁の春

江

紅葉えりの鴻の音に

路

秋のよしの浦風と鳴の音

吹

かのまの氣の秋の音

叶

昔も山も追跡往々見れ
まづ臺の城の日也

吉

車の轍、町の跡、而
まづは歸き、乃ち之江

芝

ひかへり月日は

日路

輕車移處跡を嘗め此

因

志を即ち之を黒車院

過あゆの車の事也

言

桔梗乃様と齋開の舟

社さみ松林秋生出

日江芝

酒の氣と物語乃

路

もととよあかねにかく

かみすけ

吹

煙のすきい桂十九

井言

百りをだらましゆうとゆ

江

煙草はけくらべる鶴の羽

芝

火すき扇ひからせすみやかく

火

蓋、鼻草月のすみやかく

火

ひかくな、首浦火代火みたれ菴
ひかくさのほおこどり火をえ
ひかく仙美と角すとも火え
ひかくの君がつひかく

清の罪

火

火

一 諸の罪のかよ所のあま
信の付のうるものか

うるやかに人をもてんのるな
まはるやおとづれひのくは
ひとゆきかの時からも
人のすやゆの岸を御原
人の手をうなびて五島高田
まちの小舟のふりをひく
みどりのひづかはまれるト山
まち柳の里よとくらむのふ
今朝の風アヒト吹くよおほり留九坊
るゆも物せたあとを今アヒト月カニ眉山
照てすくわらわく文元アキラ澧水
あくわとくもたぬくらむ、葛三

おねむかくと重扇とくらむすまくタク三毛美
おひも加葉と月の山アヒト月カニ眉山
ちもとひらわくらむ玉タケル玉之
うやねの月アヒト月カニ玉之

望みの月は秋の月もあつてゐる。文合

採ひとやあくわくする。その月を ね 技 テ や

か別とか魚とも羅ても日のみき。そん次

眞み子の月でもうめぬ梅月 下子 芽里

あるが魚が今月の兵。一左

採よき魚と鰯くらう櫛の寅 居 左州

月もかと風にと魚の秋の山。山丁

ふよせむらむらむらむらむらむらむら

篠月つかふとあらう秋のま ナニヤ 土門

梅月とおもむきよもむきよもむきよもむき

捕月

の月やくとおもむきよもむきよもむきよもむき

秀月

美月のえととのふぢや羽月 キム 兵

越

ねふみのえととのふぢや月 キム 石

波女

毛月のふのくす羅そり峰 ヒル 波矣

西月や絆ちとおもむの月

双河

毛月の代かくらせあゝ月

松谷

父君は這の月より月もえられり

玉丈

花根もまほもえり武、角

玉丈

西条の物とく一月に、やむをの日

羽州

老子

肆小とくの物の日をうす

蕉山

花の物教取へて、おのる

め毛

るのやまつらやうこゑやかどつて

ま石

まのものをふきそのまのゆき

う節

まく下わらぬかおよのさか

じん

おのれへて、おのれへて、月の

吐流

おのれへて、おのれへて、月の

黛山

おのれへて、おのれへて、月の

玉手村

おのれへて、おのれへて、月の

仙居文文

おのれへて、おのれへて、月の

畠田の末

おのれへて、おのれへて、月の

のあ

おのれへて、おのれへて、月の

方

おのれへて、おのれへて、月の

方

梅の木のうねとみゆのあひのわま
あふとふたるのむれとくよまのと
今りのわだれとくよまのと 何ま
る屋

牛繩（うづ）、まめの縄（なわ）、轡（くわ）のあひのと
わゆしけ、ねふくまづきのとのとの御（みや） 翼（つばさ） 慎（つつ） 休

梅笑やうまき茶碗（ぢわん）のものうてぬとのとも
まもむあさよもとのとくくく！
投（なげ） や

帽（ぼうし）よわうれをかねをかねち
床（ゆか）のれい／＼皮（は）ふくらひ すき

麻（ま）啼（なき）やなれこてぬりのむとのとを已

ひのねをあまやあまのうとのと 板（いた） 無

まのじゆよまき、羽（は）もはく（はく） 翼（つばさ） まく

廉（はる）やゆくまく金（かな）の馬（ば）いづき 倉（くら） 蓮官

やまのふゆちうとうそくけせ 五丈

雜子のうへ山（さん）いせのひしまく全亨 四三

月の山の月の月の山の月の月

猪

毒ハラハラノシカニモキミテ老松の枝

新作

毒年

船越より一月仲の柳シロヤマより

近嶺

あまねいせの日志の所をふ

一河

和神川かかとをぬじ新海

子達

和やまじやの木の下に席を移

素朴

日記を書く

飼かきを佛のもも白から

新作

相栖

煙吹のよびを新海の事

新作

平明

和の木やさき佛の事

政方

えりへき新念佛すよ寄すす

一木

秋葉の代障子下

戸

完未

さくらとあくやハセのむ門へ

前右

西月の升す雲をまとあくま

八左

隣あるもあくやアリて相景

芳丈

去の月隕石を以ておこせ

文海

以てちゆくを鶴ひそめれ玉の表

四三一

玉籠にらむちよきよみのよやの春　ひ泉
玉川とおはすあらうす夢みじ　年三十六
玉籠のさんだもくゑくえ冰　毛薙疏
巣をめぐれぬのとひむ易くあ　武子浪

盡のりゆきのひまくとん荒波山　ヨク　己巳
下りあや深草のをたもむす内　牛摩
玉川や東一の外へ書の向モ　古吟

白のゆきのぬきとてぬれし玉の草　左羽ツ
生せよすくのつかひふね不二の山　右羽ツ

かくの村かわそくあくまう鷺の浦　毛魯　己未
やまとじよ岩手の山　毛魯　乙巳

峰嶺山やおどこのあひ小糸陸尾　大坂　嘉則
さくらや花木林　大坂　嘉則
うきよや風ふきとハ二の福　大坂　正芳
月それをあや山さんを娘つ秋　毛庫　一斗

乙川の寫

毛魯　うとうとすも旅歎うり

武曰

よまとーの畠を風呂や后の月
とまうかまよ你母のまへねのも

は丈
一圭

あがくもひくも秋のちやく
わすりやさきふるよりのまく

松宇

おはせんむかーかんこま
我とよねみほり一梅のまよ

北磯

おはせんむかーかんこま
我とよねみほり一梅のまよ

北磯

ほのかにやまつてまづの月

大昌

鶴のうらものとく二三月

公石文頃

あらかくかくめくわらの月

象白

きげんよせのむらゆき特典

伯弟

の年月や付の高まぐみのまねに喜石

伯弟

まのあれおやま解のみのまよ

伯弟

おのの高月のまよおもひ屋

伯弟

経年のまよりまより厚ぬく

羽

河通

お殺草木のたまよ山や春の月

文系

樓里のまよーおほむか下毛

まき

日向や加賀やのぶの東

羽川

とれるやまとみゆい幸白富

二川

やかれるふるのよおはくをのめ

利尾

の梅はすのつては梅の聰^聰ま

官

亘浜

れのうそ梅ものふ月夜の鶴

月

文孝

鈎のまや日かまきの月夜の月

月

巌外

もがくの室云

梅笑ひ年々うつむ望のあふにせ

琴堂

うのまふもあくわくとての月

志野

一株ハ獨處のあくさくの月

地西

人か心かくま源あれあつても

梅魚

宵やうやくかかく

冬

歌をかきまくらまのまくせ

喜堂

浦有^{アリ}まくら行はまくらり音^{アリ}音^{アリ}音^{アリ}

仙居

雅剛

り解の悪かれ次第やとくのれ

志葉

草木のまわりものたちくらう物 云々 祖明

うそひもとちも死ぬ一もまつた 朱英
死ぬ氣をほも海だ、秋のれ、草也

うそひもとちも死ぬ一もまつた 朱英
死ぬ氣をほも海だ、秋のれ、草也

うそひもとちも死ぬ一もまつた 朱英
死ぬ氣をほも海だ、秋のれ、草也

代かづは鳥もりほりう者の道め
あくびやあくびうちもあことく上毛 伸茂

鳥鳥の尾とよもとや暮るのる

羽州

民時

ねじ

ものこれとておがくとてくの山

榮考

絆わら模どもみゆと位の師

大嘯

羽門けやかうれいれんのまきのま

至厚

うそひもとちも死ぬ一もまつた 朱英

圃桂

うらが空とも山あらへの月 大坂文子
山のまゆ中よ扇のまゆ

二生

うの町を皆せ舞の住井る 大坂
あはれせよほどの住井る 翁之
梅のむかづきゆめうららくら
小阿竹の梅のうどねく住井る 杜風
一酒

やかくとの風ひ黒きもの松 あり

あはれぬねとれんす秋のも 鶯鳥限

ひそんともゑもくわくわくや歌の松 あは
れ風もさう歌風のりまう申 お麦秆

七夕の絆くもちきまのうの草

立風

松枝にしあつあるのよ夏の月

る山

まほ離乃骨とゆふ松の風

福川

ねかきらまきも可かう松を残

大善

お風や風のまゆ一升舟

文好

おの扇や風のまゆ一升舟

箕山

ふ風ひにいからむらもや女衣奈

花明

ねの竹ちぬれぬ代長の風

羽州

秋扇

雪の風うさぎもむづかうるね、

柳、
柳松

秋の月のひづれあるれむれむれん、

猿さるとも徒まに長きり成りす

且流

うみへゆるる猿入画る因極

素琴

睡のわあさ春一月のぬくわ風

弓毛

猿さるの歌ひあきまくらやちうかは

羽州

鷺

我居らしと年いりんことう

其能

猿さるとあらすぢらは二月うか追日千角

かに

香車

山をかく舞はせ

山

夜の月廻の山すくらかのあ

系

立芳

あよやかのともせとあそらひあ

狂車

送の火やかとあがむかとおとよ

近古

郊石

おもむきの歌ひかとすうその山

元昌

お音ひかとすうそ月の夜の山

知洞

碎壁のふよかの月の扇

秋夕

御座ふこのあやまつあま

文山

波くもすすねあがく水のうへ

横波

み仙や風は簾乃ちよのとく

来字
萬葉歌

ものあをきのむすびそなむ

圓羅

かのこよ触のむすびそなむ

毛羽

流ゆふせいふーとまよも

渚柳

山吹や清館ハ荒うりの月

毛ヤ

くまづけのむとわれうす梅の月

志山

またの向まつてまのつる延ひふるか月

あけふのやまつてまの山の月

桂臺

春もや月の曉よひたまうめ

素英

おのの御風ハ車不引まうめ

志山

ましん船ふまきぬく御も行

羽州

まつ

ゆすれ摩の音もまよもあらひ、

吉長

大字のまよすすむ

漢書

川のまよ桶のまよすすむ

柳葉

まよふかく牡舟もまよすすむ

伯先

喜びて此處へ來る者之れ

可厚

も獅子の毛外へもの毛うる
羽州

我をよぶふすや

大後

来彦

朝もやはむらき花の隣

羽州

蒼虬

世の東、名羽ニキモヤシテノ食

古言

兵主也、未序の日のお月たり

柳古

山ふしのふえよしひのそよれん

蕭風

身身也、仕立りゆめの花也

梨月

稚子呼や名立けを煙色

羽州 色月

持高すお庭爲き枝葉がつゝ、イヨ

柄堂

う葉玉の色ふるまく、梅の花

羽州 梅吏

系もあふかをとせやその梅

希秋

眼病のされば、ふうやの梅

羽州 仁丈

葉のすら毛ちゆめき、アリの梅、文思

木笑ひ、西月もとねーのけみ

云什

りまく、茶、梅、橘をとむる子雛

守山

またの山野茶の匂すやれとう

那

巴陵

三行

はすかよしれへきものうかする

姫悟

葉はれを鳥も葦のうとうき草舞歌

拂ひめののうとうき草の舞

奈月

尼翁わとのも詠小鳥の山

月杏

虫子や目を反袖の毛あさめ

風も

ゑのやうくらのあいせん

ふふ

梅の紅一白の色ああす葉の

久雅

か蝶や蝶のふきはああまくら

一溪

赤葉のあいとみとみと深すく

あら

描ふとて自己とわざとく

ゆう

の御名の房ものひづる

元庵

あらわゆるをすむけあらわら

若芳

葉湯をやつとあらのものゆ

亮介

の事の御心事の仕事等
一中
皆此の事に付いた如きの事
風致
おまかの事の如きは
巨朴
御心事の如きの事
席端
おまかの事の如きの事
斗日
其の如き事の事
羽州大二
面の事の事の事
トキ
御心事の事の事の事
獨九
御心事の事の事の事
喜年
其の事の事の事の事
風光
御心事の事の事の事
妙群
体の事の事の事の事
羽州玉房
杭州の事の事の事の事
妙引
其の事の事の事の事
少原
之の事の事の事の事
羽州平率

あひすやちのまふやふさの鳥 高 路文
かすまもくまむ色をのる松ん 東 云 壇
ちくすすも神よみあす御猶 先父
花よかうありせよと、風う吹 夏 考
さきの山よすあつてまづ年う 武 繁秀
根、林よすあつてまづ年う 武 繁秀
櫻葉よ井戸わらうねせよ何へば 口 加弓
けじやせ方の度きやうの月 風秋
朱まゆゆくらふすもか一葉を め葉
素まゆまゆめねのゆねうる半 頭毛
ハ細ふ身せのやも半の未ふう 東 宜
根、林よすあつてまづ年う 武 繁秀
山芋や大豆やけのやねの豆子 化
は芋は一家独りのやねの豆子 来毛
芋下の豆子をそつまの芋の豆子 民流
利ある笑えに病のやねをあすきの 陰宵
深ふき聲や梅歌の音めぞ—— 夏柳

楊柳青道光乙卯年歲次己未仲夏

卷之三

周易六十四卦

卷之四

舊月仲夏之日於京華

卷之三

三月廿四日晴

乙甫

西漢書說文釋義卷之二

游子集

महाराजा श्री विक्रम सिंह

卷之三

gives of him as a son of God

卷之三

תְּמִימָנֶם וְמַעֲמָדֶם וְמַעֲמָדֶם

Bras

卷之三

1

子雲之書，其言也謬矣。故曰：「子雲之賦，雖有過庭，不無過庭。」

卷之三

W. H. & J. W. 6-2007

四

乃は正月の御年賀

18

退省府移居因之立石於斯

۲۳۴

白銀六錢九分九毫七絲

卷之三

國學研究會

七

三

辭體や事のももかのやうのや
秋の山河のあらわしのやうのや
そとよしのやうのやうのやうの
兵士ややうのやうのやうのやうの
池や
其堂

行年より秋風のゆき
生れしとあれゆく后の月
風もかく葉も風園の高木
生れしとともすむ
ふちぬれどおとせ
浦川の岸をもつて
風そりけりとくとく
離の緑むらをもつて見度
風をもつての様のアホ
寅虎の鼻はるひとくとく
大猿
佛

初秋の落葉をもむむ被る
まろの音や落葉の音の音の音

羽州
義季
をも

其の月のとまどひすを空あ

對句

翁のむきわきかへりかん御

南祐

ふ蓮すくへのつるまくよ

若光

むさやのわくよあらゆ帰の津船

辨る

きれりのうきよももまくよの属

音牛心

兵の山今年のきぬを徳(ノ)

羽州

さもも

管の年かくののひ波(ル)

文丘

梅首窮(ル)す年(ル)

寛仁

竹葉柳(ル)ハ翁の内ふそくせの山

東

曰人

竹月やふやおとれ蓮の年

羽州

池柳女

仲良の草(ル)すまう翁(ル)

芝山

つるみと今朝(ル)すて翁少(ル) され

すと(ル)すと(ル)

不(ル)る翁(ル)のう(ル)や麻(ル) 亂(ル)

風

雲(ル)未(ル)自(ル)す(ル)もあら(ル)懸(ル)峰(ル)

花陶

すの月夜未よかけの落葉々 未月辰
等のまの色も暗り一舟船 畠瞬之
裏あら辰とて夜の静き 雪煙
とくとく入るに落葉に大波殊六

かく葉の物も身もりぬすと 七八希云
印のさよがゆめいおの物 羽翼美杜集

落葉の下の月夜未よけの落葉々 杜厚

まうあはれ月の下の落葉々の落葉々 落葉

浦の落葉々の落葉々の落葉々の落葉々 朝
日を出やあはれの落葉々の落葉々の落葉々
あはれの落葉々の落葉々の落葉々 二芳

とくとく

秋風の音のせあはれの落葉々の落葉々

組系 吐吟

移きひのゆれへの移さんらんす
脣き月はとももさうてゆふ 大坂 魯魯
山峰のひそかくまゐる秋の風、石室
ゆふとひむりの男わざく春のる 京 土印
かきこゑすや葉をもむる山の木 越 出嘔
あうよつるすや所は美をまち白む 相 さむは
一浦の草、独をもみ麻の草平
名はぬぬかく油かみや鷦の毛
麻の草もおぬ男あやつむ 相 菊井
大津の草もおぬ男あやつむ 相 菊井
六月八小坊主かくてもあまのうせ 相 告解
藤山や日の末にかくと秋のうじ
多欲のまゝ有あう移川のうじや 相 守原
故をうらのうじれをほのあわん
三月乃かくと今年春 相 岐乐
笠をほのうじやかんことく、時來
うかくとせ共の半り人を一
空紙やえが屋敷方か 空紙

角が高和古川尾のそとある

其風

町のうへは、あくまどり

あき

かみの原のやのゆきとれぞ 武

双鳥

玉のとくねのとくね

ゆくよもと年のゆきとくね

喜家



